

公共空間利活用に向けた社会実験の効果分析と課題

～おおみやストリートテラス@一番街を対象として～

BR17040 鐘崎 豪
指導教員 鈴木俊治

1. 研究背景

21世紀になり、日本では人口減少や超高齢化社会などの社会問題に直面し、都市では交通弱者による自動車離れや財政逼迫による社会インフラの維持管理の困難が見受けられる。その為、今日において車中心のまちから徒歩・自転車・公共交通による人間中心のまちへの変化が求められている。

それらの手段の一つとして、「社会実験」が挙げられる。今日に至るまで全国各地にて、道路空間の再編・利活用等が行われてきた一方、短期間・単発での実施がほとんどであり、常設化までに至るものは数が少ない。

2. 研究目的

そこで本研究では、おおみやストリートテラス@一番街（以下OST@一番街）を対象に公共空間利活用の効果や関係者の意向を調査し、常設化のための条件を考察することで、今後の公共空間利活用の促進に資することを目的とする。

3. 研究の流れ

OST@一番街の効果を検証するにあたり、4つの仮説を立てた。

仮説1	軒先利活用によって歩行者通行量が増加する一方、歩行者有効幅員が狭くなり、円滑な歩行が妨げられるのではないかと
仮説2	路上で飲食する姿や看板を見て、通行人の足が止まりやすくなり、路上の滞留行動が増えるのではないかと
仮説3	店として、椅子テーブルの毎日の設置及び片付け、接客などの運営管理について課題が生じるのではないかと
仮説4	客席が増加することでお店の利用者が増加し、売上が上がるのではないかと

調査①歩行者交通量調査、調査②アクティビティ調査、調査③沿道事業者ヒアリングを通じて、OST@一番街の効果を分析し、今後の公共空間利活用について考察した。

4. 社会実験・実施場所の概要

実施期間	2020/8/1～2021/3/30、11:00～23:00
実施場所	大宮一番街商店街（埼玉県）
主催	おおみやストリートテラス@一番街実行委員会
コーディネーター	アーバンデザインセンター大宮（UDCO）
実施内容	沿道に位置する社会実験参加13店舗（飲食店10、物販店3）の軒先1mを占有し、飲食テラス席やA看板、うちわ、また沿道に横断幕や旗等を設置することによって沿道に経済効果・賑わいの創出を目的としている。
大宮一番街概要	大宮一番街は、大宮駅東口から徒歩3分程度に位置する。沿道に飲食店や衣履店が隣り並びことから多くの人々の通行や食事の場として日常的に利用され、大宮を代表する通りのうちのひとつである。 一方、敷地内からはみ出た看板・広告物、違法増築やゴミの散乱などによる景観の悪化、アーケードの雨漏、タイルの破損などインフラの老朽化が見られる。



図1 大宮駅東口と大宮一番街の位置関係

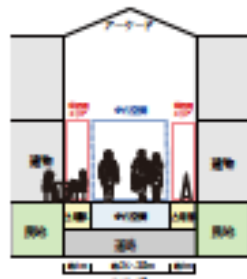


図2 大宮一番街断面図（社会実験中）



写真1 大宮一番街（社会実験前）

写真2 大宮一番街（社会実験中）

5. 調査

5-1. 調査①歩行者通行量調査

5-1-1. 調査概要

目的	①歩行者通行量の増加の有無、②利活用スペース（主に飲食店）が歩行者の通行の妨げになっていないかを明らかにする。
方法	図3の地点A,B,Cにて、7～11月/各月の平日・休日/11時～22時台/各時間台のうちの5分間、男性・女性・自転車/銀座通り⇄旧中山道の方向別に計測を行った。5分あたりの値を12倍し、その値を1時間当たりの通行量とした。



図3 大宮一番街平面図および地点A,B,Cの位置

5-1-2. 調査結果



図4 歩行者通行量推移（平日）

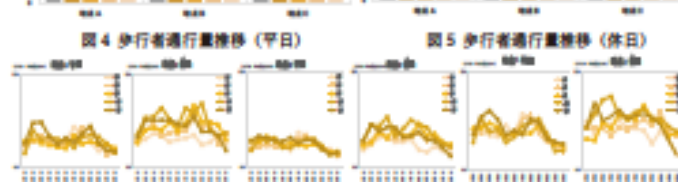


図5 歩行者通行量推移（休日）



図6 地点A,B,Cの平日・休日歩行者通行密度（人/分・幅員）

①期間外（7月）と期間中において、平日は変わらず一定数の通行量、休日は7月から10月にかけて増加していた。※7月休日が雨の為、歩行者通行量に影響を与えた可能性がある

②全日時に歩行者密度13.0（人/m・分）を超える時間帯は見られなかった。（文献*によれば、歩行者通行密度が13.0（人/m・分）を超えると、渋滞し始め、全体の速度が遅くなる）* Great Streets, Jacobs, MIT Press, 1998

これらのことから、OST@一番街は歩行者通行量の増加に寄与し、利活用によって、歩行交通に対する障害はほとんど発生しなかったといえる。

⇒仮説1を棄却。

5-2. 調査②大宮一番街・利活用スペースの利用実態調査

5-2-1. 調査概要

目的	①飲食テラス席の利用実態、②アクティビティの発生場所・種類を明らかにする。
方法	一番街全体を対象とし、9-12月の各月の平日・休日/11時-23時/:00-15:15-30:30-45:45-60の各時間4回、調査員が歩行しながらアクティビティを観察し、記録する「スキャン調査」を実施した。 観察対象は、立ち止まっている人、テラス席・地面等に座っている人とし、調査用紙に「性別」「年代」「アクティビティ」「座り始めた時間・居なくなった時間(テラス席に座っている人のみ)」を記入した。

5-2-2. 調査結果および考察



図7 アクティビティの発生位置(10月休日)

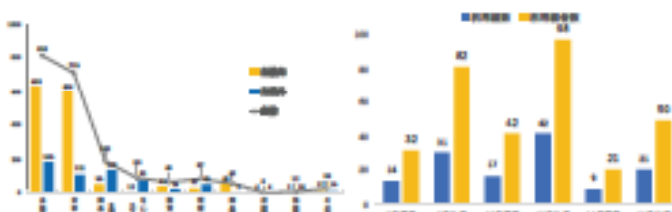


図8 白線内外のアクティビティ数



図9 各月のテラス席利用組数・利用者数

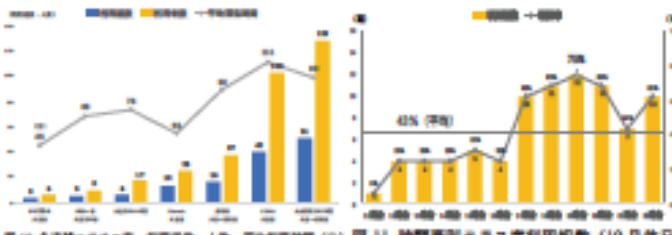


図10 各店舗のテラス席 利用組数・人数・平均利用時間(分)



図11 時間帯別テラス席利用組数(10月休日)

①テラス席は20～50代の幅広い年代層によって利用され、9～11月の総平均利用時間は45～111分、最高占有率は12/16(テーブル数)=75%であった。

利用組数・利用者数は、休日は平日の2倍以上、10月休日には一日を通じて、42組98人(全店舗合計)の利用など、多くの人に利用されていたことから大宮一番街においてテラス席の需要はあったといえる。

②アクティビティ数は、「会話する」「食事」「商品・看板を眺める」が平日・休日共に上位3つを占め、利活用スペース(白線内)には「会話する」「食事」、利活用外スペース(白線外)には「商品・看板を眺める」が多く見られた。

このことから、テラス席や看板設置等は、滞留型のアクティビティを増進する効果があったと考えられる。

⇒仮説2を採用。

5-3. 調査③社会実験に対する沿道事業者の意向調査

5-3-1. 調査概要

目的	①利活用スペースの管理運営の課題、②OST@一番街への評価、③沿道事業者への収益貢献を明らかにする。
方法	社会実験参加13店舗に、対面によるヒアリングを9月と12月に一度ずつ実施した。

5-3-2. 調査結果および考察

表1 ヒアリング項目および結果

項目	1回目(N=13)	2回目(N=12)	はい	どちらとも 見えない	いいえ	
Q1	椅子テーブル・看板の出し入れなど、運営面で課題はありましたか?	1回目 2回目	13 12	0 0	0 0	
Q2	今後も継続的な利活用を希望されますか?	1回目 2回目	10 12	3 0	0 0	
Q3	OST@一番街による広場効果があったと感じますか?	1回目 2回目	7 8	5 4	1 0	
Q4	屋外テラス席の設置による売上・集客に効果があったと感じますか?	1回目 2回目	6 6	4 3	2 3	
Q5	ストリートテラスは基本的に見ていそがでしたか?	1回目 2回目	2 3	2 3	7 5	2 1

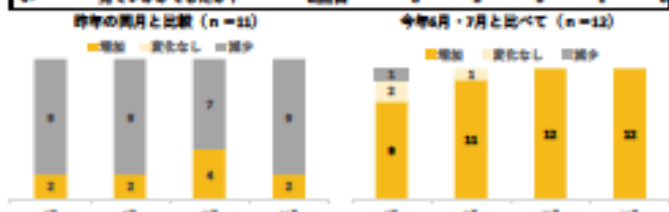


図12 2019年の同月売上比較



図13 2020年6・7月と各月の売上比較

①全店舗が「課題無し」と回答。また調査中の観察でも、閉店後テラス席は店内に収納されており、問題なく運営はできていた。

⇒仮説3を棄却。

②2回目のヒアリングでは、OST@一番街の実施について半数の店舗が「やや満足・満足」と回答。また、全店舗が「継続を希望する」と回答したことから、高い評価を得た。

③OST@一番街がメディアに取り上げられることで一番街の認知度が向上し、「間接的に来店に繋がった」、「売上・集客に効果があった」、「OST@一番街実施前月に比べて売上増があった」等の意見が多く、OST@一番街は店舗収益の増加に貢献したといえる。

⇒仮説4を採用。

6. まとめ

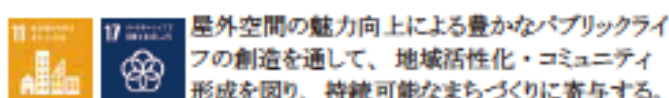
6-1. 全体考察

総括として、OST@一番街は、安心安全な歩行環境のもと実施され、経済効果・豊かなアクティビティの創出効果を有した。

6-2. 今後の課題

沿道事業者の意向調査で約半数の店舗が「沿道全体での一体感の醸成」が課題と回答した。商店街としての足並みを揃え、地下および2階以上に位置する店舗、不参加店舗の参加促進とそのための合意形成が主な課題である。

◆SDGsとの関連性



屋外空間の魅力向上による豊かなパブリックライフの創造を通して、地域活性化・コミュニティ形成を図り、持続可能なまちづくりに寄与する。